

## 『田園生活场景』の中の”地方”

西岡， 範明

<https://doi.org/10.15017/2332601>

---

出版情報：文學研究. 86, pp.1-22, 1989-02-28. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

## 『田園生活場景』の中の“地方”

西岡 範 明

バルザックが『風俗研究』の小説群のそれぞれの舞台を、まずパリとそれ以外の地域（フランス国内）に分け、後者をさらに二分して「地方」と「田園」としたとき、そして第一の小説群を『地方生活場景（Scènes de la vie de province）』、第二群を『田園生活場景（Scènes de la vie de campagne）』と名づけて発表したとき、世人はそうした区分けをなして奇異に感じなかったようである。つまりは《Province》と《campagne》の二名辞は、生活上の通念として、おおまかながら並立的意味を認められていた、と考えられる。<sup>(1)</sup> 少なくともバルザック自身は、その常識、通念をふまえて、終始用語の問題には触れず、ただこの二場景の内容を紹介することに努めた。その一例が一八四二年の『人間喜劇序文』である。そこでは、『地方生活場景』について、

[...] les Scènes de la vie de province représentent l'âge des passions, des calculs, des intérêts et de l'ambition. <sup>(2)</sup>  
とした上で、特に「地方」と「パリ」の関係のみに力点を置き、

Chacun de ces trois parties a sa couleur locale: Paris et la province, cette antithèse sociale a fourni ses immenses <sup>(3)</sup>  
ressources.

と、彼独特の対置法を披瀝している。これに対して『田園生活場景』の説明では、地誌的意味には触れず、もっぱら『風俗研究』全体の文学的思想にかゝる面だけが特筆される。

Enfin, les Scènes de la vie de campagne sont en quelque sorte le soir de cette longue journée. [...] Dans ce livre, se

trouvent les plus pures caractères et l'application des grands principes d'ordre, de politique, de moralité.<sup>(4)</sup>

こうした『田園生活場景』の位置づけは、F・ダヴァンの『十九世紀風俗研究序文』及び『哲学的研究序文』などでもなされているが、それらはオクターヴの高さこそ感じられ、やはり同じ趣意に貫かれている、とみてよい。<sup>(5)</sup>

ところで『田園生活場景』とは、前述のとおり田園小説群の統一タイトルに他ならず、その限りではバルザックの創意によるものとはいえない。本来、十八世紀の合理主義的教養を詰めこまれた彼ではあるが、同世代の文人たちの例に漏れず、ルソーの主情的な面に共鳴しつつ、一八二〇年代から三〇年代にわたるロマンチズムの激流と不即不離の関係を保っていたのである。さらに言えば、それはルソーからレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの系譜が、都市対田園の文学構図を確立させていた時代であり、どうひいき目に見ても才気煥発とはいえない彼が、地域性(地方色 ≡ couleur locale)の描写に自らの獨創性を求めるにあたって、田園と地方を区別するといった用意をしていたとは考えにくい。J・ウエンジャーは、この時期のバルザックの作品を綿密に調べた結果、彼がパリ以外の地域を指すのに専ら『Le Pays』という名辞を使用しているのに気づいた。<sup>(6)</sup>この語の現わす概念は一をもつて規定できず、地域的にも広狭の両義があり、バルザックが狭義に用いる場合、たいてい地方の小町村とそれを取巻く田園、山野の混在したイメージに拠っていて、行政的には小郡、郡、県、旧州などがその範囲に入るとみてよい。作者に限らず、話者がパリ人(的)の眼から見る際には、いわゆる地方なるものはこの程度大雑把な概念のほうだが、風俗習慣、住民気質をとらえるのに便利であるし、地元民もまたこれに倣うのが一般である。日本ならば、さしずめ「くに」「(この)地方」に当るであろう。いずれも日常感覚に適した表現である。

しかし、風俗小説家とは差異を発見する者のことである。バルザックはそれを果たした。一八三四年『ウジェニー・グラランデ (Eugénie Grandet)』の舞台に地方町ソミュール (Saumur) をあて、主人公の父としてグラランデ爺を配したとき、この町とこの老爺は相結合して、一般守銭奴の一例でもなく、また田舎守銭奴のそれでもなく、まさに

L'avare de province という特殊な種族の典型を生み出したのである。<sup>7)</sup>つまり、この老人の性格が《province》をして「田舎」「地方」といった曖昧な形容辞でなく、「田舎町」という、かなり明瞭な域、いわゆる生活・文化の小圏を指すものになっていったわけである。このことと、『田舎医者 (Le Médecin de campagne, 1833)』の構想が、二年前から進んでいた事実を並べるならば、バルザックの脳中には province を campagne から分離させ、各々を二つの相異なった効果を持つ文学的要素として定立させる作業が急速に行われたことを示唆する。Province の独自の発見によって『風俗研究』はいかにも小説体系らしくなったし、特異のコントラスト技法や形而上学的志向を正当づけることができたといえる。<sup>8)</sup>

元来、最も人間臭の濃いトゥールのブルジョワ家庭に生まれ、真の田園生活などほとんど知らなかったバルザックである。彼こそ他のいかなる作家にもまして、こうした新機軸を作り出すにふさわしかったであろう。幼少年期の多くの日々、大きな庭ともみえるトゥレーヌの美しい自然に馴れ親しんだ彼が、都で思い知らされたのは、自分は田園人でなく、地方町トゥールの町民であったということである。彼が《pays》と言っていたものは、つねに町を核として拡がる田園であったのである。しかし田園(村)は町とは違う。そして、彼の周囲にむらがる地方出身の青年たちの多くが同じ思いを味わっていたことは想像に難くない。彼らは大なり小なり「パリにおける田舎偉人」の自分を痛感したのである。<sup>9)</sup>青年にとつて、一番の衝撃は、パリと地方町の文化的、経済的落差である。彼はまずこうした意識から province を、ついでパリを、つねに連関させ、対照させながら、物語を生んでいった。その構図がほぼ描きつくされたころ、地方町対田園あるいは都对田園の意味を問いはじめる。『田園生活場景』の後発性が既にそのことを暗示しているが、その文脈、筋立によっていつそう明瞭になるであろう。次章以下は、その見地に立つての検証である。

\*

『田園生活場景 (Scenes de la vie de campagne)』を読んで直ちに気づくのは、この群に属する四篇の題名が、すべてテーマそのものの指標となっていることである。『田舎医者 (Le Médecin de campagne)』は、ベナシス (Benassis) という文字通りの田舎医者の事績を描き、『村の司祭 (Le Curé de village)』のボネ (Bonnet) 師は村の教会付司祭であって町の司祭ではない。彼の存在理由の一つは、リモージュ (Limoges) の町の司教、司祭たちとの思想的懸隔にある。『農民 (Les Paysans)』の背景は錯雑しているが、登場する農民たちはいくつかの村や集落に住む貧農であり、いわゆる町のブルジョワに欺かれ、搾取され、扇動される連中である。中世以来描かれてきた伝統的な農民群像がそこにある。それは田野にうごめく動物めいた人間たちである。最後に『谷間の百合 (Les lys dans la vallée)』はトゥレーヌのある谷間に引きこもった女主人公の物語であるが、「谷間」とは、ボダンも指摘しているように、バルザックの最も愛好する *campagne* のフォルムであること、前三篇もひとしく谷間の人間絵巻であったことを付言する必要がある。所屬作品が少いせいもあるが、全篇すべてがこうしたテーマチックな題名を冠された例は、他の「場景」には見当たらない。<sup>40</sup>

つぎに人物たちの相関関係、あるいは筋立において四篇共通の点を探ってみると、いずれも *provincial* (e. aux) と *campagner* (e. s) それに *Parisien* (s. es) の相互交流から成っていることが容易に観取できる。

『谷間の百合』のフェリックス (Félix de Vendresse) は、トゥールの町中で出会ったモルソフ夫人 (madame de Mortsauf) の面影を胸に秘めながら、ボン・ド・リュアン (Pont-de-Ruan) 近くの彼女の館に辿りつき、そこから野の百合との長い純愛物語が展開してゆく。それは、彼の家庭が象徴する冷ややかで陰湿な町を囲む目に見えぬ壁からの脱出、云うならば、醜悪の市 *petite ville de province* から善美の園 *campagne* への救霊の旅であった。狂的な夫モルソフのために、夫人はもちろんフェリックスも煉獄の苦しみを味わい続けるが、それさえ田園の歓喜を

消し去るものではなく、むしろ地方町に対する田園の生活の精神的優越を啓示する。人間の魂は自然の美によって償われ、まだ都会化されていない地方青年の鋭敏な感性は、田園の本質を理解し、それを味わいつくす。この田園と町の融和にパリが干渉してくる。そもそもこの青年の恋は、パリ貴族界で磨かれたらしい夫人の美と知があつて生まれたといえるであろうが、やがて彼は上京し、百日天下騒燥の中で、パリを象徴するダッドレイ (Dudley) 夫人の悪魔的な美と官能にまどい、そのため、モルソフ夫人に忠実ならんとする靈の苦悩をなめる。また両夫人はそれぞれの性格と立場により、相異なつた嫉妬や苦しみを味わうのである。province と campagne と都パリの技き差しならぬ因縁を読者は感じとる。

さて、ベナシスがラングドックの小さな町ソレーズ (une petite ville de Languedoc, Sorreze) 出身であつたことを記憶する読者は少いであろう。彼はまた作者バルザックと同じく、そして前出のフェリックス、後出する『村の司祭』のジェラール (Grégoire Gerard) 同様、地方町の高等中学を出て、パリに遊学するが、都の頹唐の氣に染まり、大切な愛の生活をふいにして、その心の傷をいやすため田園を遍歴したことになっている。パリを志向する地方青年の晩年を示す第二の典型である。

『村の司祭』では、こうした点からの人物構成はや、複雑にみえる。田園の風俗淳化と更生を志向したボネ師は、パリに生まれ育ち、直接モンテニャック (Montegnae) の村司祭となつた点、ベナシスと異なるが、この物語の表の主役は地方町リモージュに住む銀行家夫人ヴェロニック・グララン (Veronique Gralin) である。町で犯した大罪を贖う唯一の手段として、謎めいた語りのなかに、ボネ師から啓示を受けて、夫人はモンテニャックの不毛地を改良するため、そこに移り住む。地方町での鬱屈した生活と、その倦まず蓄積された財力が田園に貢献する、皮肉といえは皮肉な形で province が役立つ。さらに、これも皮肉な形でパリが事業に参入してくる。リモージュ出身と思われるジェラール青年は、栄達の夢にふくらんで理工科学校に入った秀才であつたが、官界の年功序列的人事

と中央独占の権力機構に災わいされ、地方に飛ばされ仕事らしい仕事もなく、「一地方の奥に腕をこまねいて」いる。<sup>12</sup> 脾肉の嘆をかこつ彼を、工事担当者として夫人に推挙するのは、地方町の実体を知り抜いているグロステール (Grossetete) 氏という、リモージュの町の有力者であった。彼だけではない、青年医師ルボー (Roubaud) もパリの医学校を出たが、リモージュの町の因習に爪弾きされた、地方町の犠牲者のひとりである。彼もまた事業の重要な担い手となる。もちろん、この大事業には町の司教、司祭、実業家、それに司直の人々も、善意をもって関与してくるのである。

『農民』にはその逆の形態がみられる。農民たちがアルマニャックと呼んで烈しい憎悪を吐露する対手のモンコルネ (Montcorne) 夫妻はまさしくパリからの外来者である。アルマニャックに対するブルゴーニュ人 (Bourguignons) の怨念という、中世以来の歴史的事実がパリへの田園の敵意と混融して、フランスにおける地域対立の根深さにまで思いつたらしめる。<sup>13</sup> それゆえ、この物語は大地主対小作人の経済戦争であるとともに、パリ人対 *campagnards* のそれでもあるといえるだろう。この闘いには当然ながら *Provinciaux* が介入してくるはずである。主役の一人になるブロンデ (Emilie Bondet) がアランソン (Alençon) 出身であったことは偶然としても、地主の森を侵犯する農民たちをひそかに庇い、時には扇動して、ついに全面衝突させるのは、ラ・ヴィル・オ・ファイ (La Villaux-Fayes) に住むコーベルタン (Gaubertin) であり、それに協力するのがスーランジュ (Soulanges) の町の公証人リュパン (Lupin)、代訴人、薬剤師、のちの町長スードリー (Soudry) 夫婦らということになっている。因みに、彼らは一括して *La bourgeoisie de province* と呼ばれる。<sup>14</sup> こうした町の連中については、作者は必要あるとみたら、『Province』という語を付けるが、それに対して、六十軒の小村ブランジ (Blangy) に住む、同じ仲間のリグー (Rigou) を *campagnard* と呼んで、町の仲間とは厳しく区別している。<sup>15</sup> 人口的には対して差もないように思われるこれらの架空の町村に、バルザックは町と村それぞれ相異なつた役割と性格を付与したつもりであつた

と考へざるを得ない。

\*

パリからの地主がどれほど威を振るおうと、町びとが別荘暮らしをいくら楽しもうと、田園の永遠の支配者は百姓であることを『農民』は教える。彼らのほとんどが無知で粗野で、貧しいがためか、無類に狡猾であり、土地への執着という形でその食欲さを剥出しにする。例えば、冒頭のかわうその一件だが、フルシヨン (Fourchon) 爺にみごと一杯喰わされたブロンデは、以前アランソンの判事であつた父の話を思い出す。

Ce bavardage de laquais permit à Blondet de se livrer à quelques réflexions sur la profonde astuce des paysans en se rappelant tout ce qu'il en avait entendu dire par son père. le juge d'Alençon.<sup>58</sup>

この一節は、レ・ゼーグの (Les Aigues) のまわりの農民たちの有様を一般のそのの典型として提示しようとする意図を感じさせる。ともあれ、ブルゴーニュの優美な自然を背景としながらこの作品を蔽う陰惨で暗鬱の気は、登場人物の大半を占めるこれらの農民たちの姿に起因する。ルソーやレチフからサンドラの農民観とはもちろん、バルザックの他の作品にみられる農民像との余りの相違に、写真というよりむしろ過剰なロマン趣味の変形かと思わせるほどのものである。

しかしながらこれは例外でもないのであつて、あの『谷間の百合』の中でも、農民たちはモルソフ氏とともに、天界を乱す小悪魔のような姿で見え隠れする。夫人の農場経営は、彼女が地主である限り彼らとの戦いである。この天使の口から洩れる言葉が、その環境の厳しさを、そしてこの物語が通り一遍の甘い純愛物語ではないことを示唆するであらう。

—A quoi bon vous inquiéter pour des riens, allez à vos seiges. Vous savez! Si vous n'êtes pas là, les métayers lais-

seront les glaneuses étrangères au bourg entrer dans le champ avant que les gerbes n'en soient enlevées.<sup>21</sup>

落穂拾いでみせる農民たちの小狡さを余りきびしく抑えると、『農民』におけるような悲劇が生じかねないのである。夫人が目を見せないのはそうした農作業の場だけではない。地主の不利益など意に介さぬ分割小作農たちは、農産物の売却価格の談合さえする。

— [...] Nous avons pour concurrents nos propres *femiers* qui s'entendent au cabaret avec les consommateurs, et font les prix après avoir vendu les premiers [...]<sup>22</sup>

夫人のこの嘆きは、『農民』で酒亭 Grand-Vert にたむろす不良百姓どものイメージを髣髴させる。プロンデのノルマンディ農民も、コントウレーヌの農民も、ブルゴーニュのそれと似たり寄ったりということになる。

『田舎医者』のベナシスが出会ったドーフィネ (Dauphine) の農民も、最初は彼を迫害する。彼の役割は、こうした無知、貪欲、狡猾な農民たちに、知の光を授け、悪のかわりに善を志すだけの経済的余裕を与える啓蒙家、指導者のそれであった。『田園生活場景』の四篇中、最も善き農民像を作者に提供したベナシスだが、その農民観は決して甘くはない。

— [...] je les ai acceptés pour ce qu'ils sont, de pauvres *payans*, ni entièrement bons ni entièrement méchants. [...] Enfin, j'ai surtout compris que je n'agrais sur eux que par des calculs d'intérêt et de bien-être immédiats. Tous les *payans* sont fils de Saint-Thomas l'apôtre incrédule, [...]<sup>23</sup>

モンテニャックでは以前、盗みはもとより殺人事件もあり、甚だ治安の悪い所であったという。住民つまりリムザン (Limousin) の農民たちの質の悪さは、ドーフィネのそれ以上であったようだ。村の予審判事のクルージエ (Clousier) の証言がそれを示している。<sup>24</sup>

以上述べたように、田園の住人たる農民たちへのバルザックの眼は厳しいものがある。田園がそうした社会であ

るならば、『十九世紀風俗研究序文』にあるような、都会の激烈な相剋に破れ、疲れきった人々が、そこに最後の休息と平安を求めることができるのであろうか。それが可能となる道は差当って一つしかないようである。心の傷をエネルギーの源とし、都市が見失った理想郷を、より原始の姿に近い田園の民たちを使って建設すること、その過程の中に、そして完成のあかつきに、平安と休息が見出される。そして、それができるのは、とりわけ、優れた政治性をもった医者、僧侶、技師、農場主、法律家たちである。『農民』制作の意図はべつとして、モンコルネの失敗は、彼がこれらのいずれにも属さず、心に傷もなく、真の平安と休息を求めてもいなかっただからであろう。ところで、ベナシスやヴェロニックの臨終には村人たちが騒ぎ集まる、泣き叫ぶ者もある。そこには打算も虚飾もないであろうから、死にゆく者の平安は乱されまい。ベナシスが身まかつた時、十里四方から老若男女が集まり、柩は古くから住む村人四人にかつがれ、涙と深い沈黙のなかに葬送の鐘がなるのだが、このあたりから「田園」が主役に代わるのに読者が気づく。

Le soir, la foule était dissipée, et chacun s'en est allé chez soi, semant le deuil et les pleurs dans le pays.<sup>23</sup>

以後、農民たちが前景を賑わすことはない。訃報を受けてジュネスタスが辿る村道には、十二月の深い霧が森を蔽い、水滴となって「涙のように」落ちていく。

Le colonel Genestas, dont le cœur était serré [...], sympathisait avec cette nature, si triste. [...] la vallée qu'il avait vu si joyeuse pendant son premier voyage. [...]<sup>24</sup>

自然と人間の共感あるいは合一は、田園だけが現出できる平安の最高の形態であろう。主人公の死後、時日を経てジュネスタスが得たこの自然(田園)の参会を、他の二人の主人公はいまわの時に実現させる。『村の司祭』のヴェロニックは、隣室で祈るその母と息子と召使いたち、ボネ神父たち、診察のルーボー医師とピアンション博士をかたえに最期を迎えるが、バリから来たピアンションの眼からみると、

Ce fut une scène que le silence le plus profond, celui d'une nuit d'été dans la *campagne*, rendit solennelle. <sup>24</sup>

苦行を貫いた聖女の死は、田園の静寂に包まれて一層荘厳さを増す。彼女の魂の行旅を知らなかったパリ人ピアンションには、田園のもたらす荘厳さだけが感じとれたのかもしれない。モルソフ夫人も同様な情景の中で昇天するが、その魂の愛人であり、ともに田園の生を味わったフェリックスの耳には、

Par un hasard assez naturel à la *campagne*, nous entendmes alors le chant alternatif de deux rossignols qui répètent plusieurs fois leur note unique. [...] <sup>25</sup>

と、二人の愛の共鳴を田園の中に聴きとるのである。

要するに『田園生活場景』では、現実的思想からは農民が、神秘的思想からは情念のテーマに誘われて田園（自然）がクローズアップされてくる、といえるであろう。そして、前者の代表である『農民』を同『場景』の冒頭に据え、後者のそれといえる『谷間の百合』を結尾に置いて『哲学的研究』への跳躍台としたことを思い合わせると、バルザックの思い入れは後者に対して深いと考えられる。

こうした判断に即して *campagne* なるものを理解するとき、それと、本来人工的で住民（人間）を抜きにしては意味をなさぬ *Province* なるものが、彼にとって相隔たることの大きい文学的観念を成していた、と結論することができるとであろう。

\*

存外なことに、この『場景』の中で、彼は *campagne* の内容を限定したり、特別な定義づけを行ったりしてはいない。それは主人公たちの生きざまを通して、総合的なイメージの結合によって顕現されるべきものようである。村 (*village*) にしても谷 (*vallee*) にしても然りである。それは自然乃至田園の懐の深さにも由るが、『風俗研究』

という秩序ある創造世界の内部関係において、パリ及び地方、特に地方 (province) との対蹠物という設定があり、而も『地方生活場景』が先行したという、前述の事実にも由るであろう。その為か、『田園生活場景』の各作品においては、『province』についての定着した観念をことさらに披露し、『campagne』との違いを強調する手法が目立つ。

四篇の作品のうち、田園の住人を特に描いた『農民』が、『province』についての記述の密度が最も高く、かつ甚だ特徴的なのであるのは、右の推測を裏付けている。<sup>65</sup>前に述べたように、それはラ・ヴィル・オ・ファイとスーランジュの町びとがレ・ゼーグの紛争に干渉してくる章に集中している(第一部第四章～第二部第一章)。その例を選んで挙げてみよう。

旧地主の死によってレ・ゼーグの土地が競売に出たとき、ゴーベルタンらの陰謀を知っていたスーランジュの町の代訴人は、その旧主人であるパリの代訴人(彼はモンコルネに入札を依託されていた)に、なにも告げなかった。語り手は、それがいかにも地方人らしいと云う。

Quoique soupçonnant le plan formé par Gaubertin, Lupin et Soudry, l'avoué de province se garda bien d'éclairer son ancien patron. [...] Ce mutisme, particulier à l'homme de province, [...] Si l'homme de province est sournois, il est obligé de l'être. [...]

この場合、地方代訴人が忘恩を働いたのは、もしばれたときはネポチスム(縁戚支配)の強い町のことゆえ、完全に村八分を食う惧れがあったからである。また、同町の有力者で憲兵隊長のスードリの夫人は、町第一の上流サロンの自慢なのであるが、『地方生活場景』でも屢々みられたように、バルザックは嘲弄気味にそれを紹介している。

Le portrait de cette reine, un peu grotesque, mais dont plusieurs exemplaires se rencontraient encore à cette époque en province, [...], ne fait-ce que pour expliquer combien sont redoutables de pareils hilliputiens, [...]

ただこのサロンには些か愛すべきところがある、それは田舎の連中も出入りしていて、鄙びた空気が混つてくるからである。

*Les physionomies des habitants y sont tout autres qu'au sein des bonnes, grosses, méchantes villes de provinces. La vie de campagne y influe sur les mœurs, et ce mélange de teintes produit des figures vraiment originales.*

この小説は一八三五年に着想されたものの、四四年から四七年にかけてやっと形を成したものであるから、『地方生活風景』はほとんど完結していたし、*province* についての作者の観念は固定し、それに読者にもそれが浸透しているという安心感もあつてか、用法にマンネリズムの臭いがする。

『農民』に比べると、その四年前に発表された『村の司祭』の舌鋒は鋭く、高度の文明論、政治論に達している箇所もある。それは我関せず式の揶揄に止まらず、主人公たちの重大な決意に関与するものとして、自説を客観化する努力がなされている。

愛人タシユロンが強盗殺人の大罪を犯してしまう原因は、地方町の無気力、沈滞の気風と、そこから生じる耐え難い倦怠、特にサロンに集まる地方インテリの凡庸、卑俗に対するヴェロニックの反発と抵抗にあつた。

*Malheureuse dans toutes ses tentatives, mal jugée, repoussée par l'orgueilleux et taquin qui distingue la société de province, [...] madame Grain rentra dans la plus profonde solitude.*<sup>82</sup>

このリモージュの才女の状況は『地方生活風景』に登場する幾多の田舎才女たちと全く同じものであるが、彼女たちには適当な才覚と軽薄さと、金銭的余裕さえあつたから、パリへと脱出できたし、そこで花も咲かせた。ヴェロニックの場合は、一途なためか、殺にこもり、内攻のなかにエネルギーは凶暴となつて、脱出には最悪の手段をとるまでになつたのである。以後、彼女の心の傷は、少なくとも肉体を痛めつける苦行と、田園の静寂と沈省と、そして明るい建設の槌音によってしか癒されることはないであろう。筋の必然性はそこに保証を得る。従つて、地方

町が筋に負う責任は強調されざるを得ないのである。たといそれが無故意のものであつても。ともあれ、ヴェロニクも町とともに有罪といえる。一方だけを批判も非難もなし難いところである。

これに対して、無垢の青年ジェラルルの訴えは、われわれをして単直に肯かしめるであろう。地方は才能ある青年を殺す。

《Eh! monsieur, ne connaissez-vous pas l'influence de la province et l'action relâchante d'une vie précisément assez occupée pour user le temps en des travaux presque futiles et pas assez néanmoins pour exercer les riches moyens que notre éducation a créés.》<sup>82</sup>

そこには一地方土木事務所といった職場に配属された青年技師が、花々しい中央官庁への配転を待ち望む姿が想像される。青雲の志を抱いてパリに出た有能な地方の青年が、苦学力行の末に都落ちをする、といった例は無数にあるはずである。またそうでなくては社会も国家も成り立たぬ。『Z・マルカス (Z. Marcas)』のラブルダン (Rabourdin) のように祖国を離れてゆく者もまた必要であろう。ジェラルルの嘆きも、地方町の存在そのもの、その位置、本来の機能などについてのことではない。それらが永い歴史のなかで失つてしまった活力や独自性あるいは何らかのヘゲモニーについてである。それすら地方町のせいばかりではなく、責任は中央集権の社会体制にあり、パリにあることをジェラルルは知っている。<sup>83</sup>

しかし、作者の精力と情熱を注ぎこまれた青年たちは、作者と同じく、あるいは作者以上に、パリと地方町の落差の甚だしさが身にこたえる。街の形態が相似であるだけにいつそう耐えられぬのである。この両者とは異質の、それゆえ新しい創造の可能性を孕む田園へと、正に欣然として赴いた彼の行動の意味はそこにある。provinceで悶え苦しんだ青年は campagneに青年らしい安らぎを見出すであろう。<sup>84</sup>

バルザックにとつて、凡庸な老人や無気力者の平安はむしろ地方町にあるようである。『谷間の百合』のフェリッ

クスは、そういう父の家で苦しめられたのである。革命時代、王政復古のため力を使い果たした父は、ナポレオンが帝位につくのを待っていたかのように、

[...] il s'était réfugié dans les douceurs de la province et de la vie privée. [...]

これはフェリックスの吐く言葉であるが、すでに田園と都の生活体験を積んだ少壮政治家としてのそれであることに留意する必要がある。その裏には、若き日をトゥールとサッシェ (Sache) で過ごし、いまやパリの文壇の花形となったバルザックの姿がみえる。なおフェリックスは、ポン・ル・ヴォワの寄宿学校の思い出を語る。興味深いのは、バルザックが最初の原稿に、

Huit autres années s'étaient passées entre les quatre murs d'un collège de province.

と書きながら、刊行本ではこれを削除した<sup>33</sup>ことである。古い城壁乃至その跡に囲まれて自ら閉塞の中に平穩を樂しむ老人と、町を圧縮したような寄宿学校の壁中に閉塞させられて苦悶する青年、といった構図がバルザックの脳中にはつきりと浮かんでいたかどうかは定かでない。しかし、そうした父子の関係は『ルイ・ランベール (Louis Lambert, 1832)』にも現われているし、『田舎医者』にも現われている。

フェリックスと同様、オラトリオ宗団の経営するソレーズ寄宿学校で、ベナシスは十年という長年月を送らせられる。

[...] et j'étais plongé dans la solitude d'un collège de province, je fus, sans aucune transition, transporté dans la capitale.<sup>34</sup>

その間に、父は地方の吝嗇家が味わう蓄財の楽しみに自足しているのである。

[...] les lentes économies qui se font en province, où l'on tire vanité de la fortune et non de la dépense.<sup>35</sup>

この父子の心境の懸隔が、パリでの息子の放蕩、不行跡を生む大きな因となっている。二組の父子の関係は当時

の地方町に多い例であつたらうし、二人の父は地方町の生活方式の象徴であらう。『田園生活場景』は、この父子関係、そして夫の吝嗇（ヴェロニクの場合）と母の吝嗇（フェリックスの場合）が大きな構成要素となつてゐるのである。

要するにいかなる角度からしても、氣の毒にも地方町は、崇高さも壮大さも、花々しさも、作者によつて認められていないことになる。

現実には、地方町すなわち province は政治、経済、文化のあらゆる面で、直接的に田園すなわち campagne を支配し、またそれに貢献し、奉仕さえしているのであつて、生活は混然融合してゐるはずである。それをバルザックのように、性格や思考、感情といった文学的要素から、かくも截然と区別され、好悪を二分された例は珍しいと言わねばならない。複数対象がもつコントラストの発見と強調とをもつて、自己の創作技法の要件とした小説家バルザック、そのことに思い到れば、すべて肯定できる。しかも、当時の文風の然らしむるところで、美醜、広狭、高低を主な基準とする美学がバルザックにつきまとい、コントラストの構成は自然この美学に応じがちになつた。誰の責任であれ、ちつぽけな利害によつて横だけのつながりによつて成り立つ地方の町は、パリにしても、田園に対しても、つねに負の側に置かれてしまふ。『田園生活場景』の興趣もこれに負うところが多く、この構造を念頭に置かずしては、読み方は完全といえないであらう。

\*

彼の美学的嗜好に反して、人間界乃至社会は、本能に従い、欲望の赴く方向に發展拡大してゆくことをバルザックは承知してゐた。『人間喜劇』全体がその事を証明しており、この架空世界の活性は止まることのない欲望のもつ動力が生み出したものである。『人間喜劇』は、現在の社会構造が一新に値するほど停滯もせず、人間の進歩

を阻害する形になっていないことを示してくれる。すなわち、物力思想的な諷刺も、サン・シモンやフリーエの理想主義的社会主義の樂觀も、バルザックの捕えた現実とは相容れないのである。

*Je ne partage point le croyance à un progrès indéfini, quant aux Sociétés, je crois aux progrès sur lui-même.*<sup>85</sup>

『農民』では農民を扱いかねて、筋を探しあぐねていたバルザックは、その厄介な農民を素材として、その農民の未来のために、ベナシス、ヴェロニクをして、現実在即した理想的共同体建設の大きな可能性を実証させた。彼らのプランにより、周囲の自然と調和して、その美を汚すどころか、かえってその美を高める形の多耕作地開拓が進められ、農民に与えられた私有農地は肥やされ、拡大してゆくことになる。それと平行して、外との交通道路網が整備され、商工業が誘致されて、communesは繁栄の一途を辿る。<sup>86</sup>

こうした建設的事業に不可欠の条件は、農民に生来の素朴さ、従順さが保たれていること、近代科学の知識をもち、社会的経験を積みながら無私無欲の指導者（行政者）と、節制と隣人愛を永續させ得る宗教家たちの複数指導体制である。それらの条件が欠けたとき、この理想郷は成り立ち得るであろうか。また一旦は成功しても、将来の不安はこのるのであるが、バルザックはそれについての予言はしていない。ただ当分の間は、理想的精神が生き続けるであろうことは、ジュネスタスやジェラルドたちの土地への定住ということによって想像できるだけである。

これと関連して、他の『場景』、特に『地方生活場景』で描かれた地方町の実態を知る読者にとって、少々意外に感じられる記述がある。まずベナシスの言葉に、

— *Peut-être finirons-nous par prendre l'ournure de petite ville et par avoir des maisons bourgeoises.*<sup>87</sup>

という條りがある。ベナシスが健康に育て上げた村も結局はあれらの町と同じ形態をとって頹廢してゆくのであるうか。しかし彼のこの言葉には誇りと期待がこめられているのは文脈によって明らかである。文明社会の最少単位的な存在は、彼にとって地方の小都市であるらしい。ジュネスタスの軍旅の思い出話に口を挟んで、ベナシスはこ

うも言うのである。

—Oui, [dit le medecin en souriant], il vaut mieux bâtir des villes que les prendre.

同じ思想は『村の司祭』にも読みとることができる。長男の犯罪を恥じて故郷を捨て、アメリカに渡ったタシロン一家が、不撓不屈の開拓精神で、荒野に村を出現させるまでになるが、それがやがて町に発展する勢いをみせる。

Ce village est devenu presque une ville. [...]

田園の民が豊かになり幸福をつかむとき、町がおのずから生じる。この町の積極的建設こそは、バルザックの創造欲が *campagne* に見出した大きな糧であった、といえる。

ここに到って、われわれはあらためてバルザックの矛盾に逢着する。彼は地方町すなわち *Province* の文明上の意義を教えながら、同時にその必然的に落ち入る状態を嫌悪し嘲弄する。その点、彼と同じように情熱をもって人間行為の根源とみなながらも、スタンダールは徹底したエゴイスムを唱えて、自分の好悪のまゝにフランスの小町などを無視する態度をとった。スタンダールとは逆に、眼前に存在するものはすべて無視できぬ逞ましい観察であつたバルザックは、取るに足らぬ地方町をも重んじすぎた。それでも単なる風俗作家に甘んじておれば問題は生じない。彼が形而上的思想家の一面を持つていたこと、その創造世界においては、すべてが存在価値によつて分類され、格づけされるべきであつたところに、地方町の幸と不幸がある。『田園生活風景』も飽くまで『風俗研究』ひいては『人間喜劇』という全体の中の一環でなくてはならない。ルソー以来の自然養美の心を持ちながらも、*campagne* だけを勝手に切り離して堪能するわけにゆかなかつたのである。当然ながら地方町が大きな役割を与えられる。作家の矛盾はそのまゝに、『*Province*』はこゝでも確かにその文学的役割を果たしている。

[注]

- (1) R・フォルタシエは、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌが『わが父の生涯』において、すでにパリと地方と田園の三者をはっきりと区別したと述べているが、必ずしもそうではないようである。次のような文章はその例証である。

On m'objectera que les gens des villes ne trouveront donc pas d'épouses ? ... Je voudrais bien pouvoir dire qu'on devrait faire un échange et leur donner des filles de province, et nos Parisiennes aux jeunes gens de la camapagne. (*La Vie de mon père* [Ed. Garnier, p. 45]) 地方と田園は修辭的な連記の形こそとっているものの、パリあるいは都市に相對する地帯として互いに混用されている。R・フォルタシエの言説については、Rose FORTASSIER: *Introduction de 'Le Médecin de campagne'* [La Comédie humaine (nouvelle édition)] Ed. Pléiade, tom IX, p. 355. 參照。

- (2) *Avant-propos* [La Comédie humaine (nouvelle édition)] Ed. Pléiade, tom I, p. 18.  
參照。以下、この版本からの引用には C. H. の略号を付す。

- (3) *ibid.*, p. 18.  
(4) *ibid.*, p. 19.  
(5) この序文では『田園生活場景』についての記述は、『人間喜劇序文』よりもかなり長く、かつ直接的な表現がなされている。拙論の展開にも関連するのべ、(1)に一部を掲げる。

Enfin, il (l'auteur) reposera la vie, là où elle se repose à la campagne, où se retrouveront les débris des hommes brisés par la politique, la guerre et par les orages de la vie. (Félix DAVIN: *Introduction d'Etudes philosophiques*) C. H., tom XI, p. 209. (田談)

『十九世紀風俗研究序文』では前掲の序文とは、同じ記述のあとに次のような一節が附加されている。

Là donc le repos après le mouvement, les paysages après les intérieurs, les douces et uniformes occupations de la vie des champs, après le tracas de Paris, les cicatrices après les blessures, mais aussi les mêmes intérêts, la même lutte, quoique affaiblis par le défaut

de contact, comme les passions se trouvent adoucies dans la solitude. (Félix DAVIN: *Introduction d'Etudes de mœurs au XIXe Siècle*) *ibid.*, pp. 226-227.

(6) Jared WENGER: *The province and the provinces in the work of Honoré de Balzac* [Princeton Univ., 1937] p. 8. 参照

(7) C. H. tom. IX, p. 237. ついでながら、バルザックの作品の日本語において、ほとんどの訳者が、このバルザックの区別に配慮しなかった。また配慮してもそれを表現できなかったように思われる。筆者が見た限り、〈campagne〉も〈province〉も「田舎」という語をあてているばあいが大多数である。たしかに、バルザックの用いる〈province〉なる語に対応する日本語を作り出すのはむづかしいようである。〈campagne〉についても然り。

(8) これについては拙論『地方生活場景管見』(『文学研究』第八二輯)を参照されたい。

(9) 『幻滅 (Illusions perdues)』の第二部のタイトルは「パリにおける田舎偉人 (Un Grand Homme de province à Paris)」である。主人公リュシアンが彼らの一つの典型であることは余りにも明白である。

(10) Thierry BODIN: *Introduction de Les Paysans* [C. H. IX] pp. 19-20. 参照。

(11) 一八四五年の『人間喜劇』作品カタログには、異なった予定作品名が記されている。『予審判事 (Le Juge de paix)』がそれである。しかし、これさえ、この『場景』と無縁なタイトルではない。かつてペナシスは司祭か、田舎医者か予審判事になりたかったと言った。またヴェロニックの主要な補佐役の一人クルージュエ (Cousier) はモンテナヤック村の予審判事である。

(12) これはジェラルールの手紙にある文句だが、前後合わせて原文では「... et je me croise les bras au fond d'une province [?]」(le pays) ne me permet pas de sortir de la localité dans laquelle je suis parqué [...]」(C. H. tom. IX] p. 800.) である。この province の用法は旧来のもののもうである。

(13) バルザックはこの点を強調させるためか、森の番人クルートキユイス (Courtécuisse) をして、主んモンコルネらを指して「Ces Armuriers de Parisiens devraient bien rester dans leurs boues de Paris...」(C. H. tom. IX] p. 148) と言わせた。反対に町のブルジョワ

ワであるコーベルタンへの敵意は些かもみられない。同じ地方人意識があるためか。

- (14) *ibid.*, p. 272 参照。彼らに対する作者の感情を窺い知るには、その後数行を読めば足りる。Cette bourgeoisie de province si grassement satisfaite d'elle-même, pouvait donc primer toutes les supériorités sociales. Aussi l'imagination de ceux qui, dans leur vie, ont habité pendant quelque temps une petite ville de ce genre, peut-elle seule entrevoir l'air de satisfaction profonde répandu sur les physionomies de ces gens qui se croyaient le plexus solaire de la France, tous armés d'une incroyable finesse pour mal faire. [...] *ibid.*, pp. 272-273.] 農民たちに対しては、これほど激しい批判はみられない。

- (15) *ibid.*, p. 302. 参照。R・ボタンに言わせると、ブランジの村にしても、町との接触で墮落しているはずで、区別するのはおかしいようである。

- (16) *ibid.*, p. 78. なおイタリクは筆者による。以後の引用文においても然り。

- (17) *ibid.*, p. 1016.

- (18) *ibid.*, p. 1032.

- (19) *ibid.*, p. 415. このペナシスの意見は作者バルザックの人間一般についてのそれがほとんど敷衍しになっている。『人間喜劇序文』の一節を掲げてみよう。

L'homme n'est ni bon ni méchant, il naît avec des instincts et des aptitudes. [...]

- (20) *ibid.*, p. 706, pp. 816-817. 参照。

- (21) 前出の注(5)参照。

- (22) C. H., tom. IX, p. 598.

- (23) *ibid.*, p. 599. 同じような体験が、モルソフ夫人のもとを去るときのフェリックスについても語られる。

- (24) *ibid.*, p. 862.

- (25) *ibid.*, pp. 1210-1211.
- (26) 『農民』で17回、『村の司祭』では12回、『田舎医者』5回、『谷間の百合』は2回。なお『田舎医者』には *provinciaux, provinces* という語が一度ずつ出るが、違った用法のものである。
- (27) C. H., tom. IX, p. 135.
- (28) *ibid.*, p. 261. 次の引用文も同じ。
- (29) *ibid.*, p. 699.
- (30) *ibid.*, p. 802.
- (31) *ibid.*, p. 801. 彼の批判は、厳密に言えば、官界中枢の自己閉鎖性に向けられている。バルザック的な青年はすべて「閉じられた場」を嫌悪する。それは創造を生まなうからである。〈Il se passe à Paris des monstruosités : l'avenir d'une province dépend du *visa* de ces centralisateurs qui, par des intrigues que je n'ai pas le loisir de vous détailler, arrêtent l'exécution des meilleurs plans: [...]〉 [*ibid.*, p. 801] の言は、本「風景」において、地方への同情が感じられる珍しい例である。
- (32) A・ロランは、ジェラルルの中央批判をルイ・ランベールのそれに比している。地方出身の俊秀とともに都を去って地方に帰った。それだけにパリへの批判は手厳しいものがある。ただ、ロランの皮肉な眼からすると、ジェラルルは、モンテニャックの事業が完成したあとでは、いすれ人並みの *prosaisme* に陥ってしまっただろう、と捉えられる。[André LORANT, *notes et variantes* de 'Le Curé de village'] (*ibid.*, p. 1606.) 参照。
- (33) C. H., tom. IX, p. 1001.
- (34) *ibid.*, p. 1688. (Notes et variantes) 参照。バルザック自身の幼少期体験と『ルイ・ランベール (Louis Lambert)』の物語とに余りにも相似するきらいがあるため、意識して、生活の記述はもちろん、「地方寄宿学校」という語も削ったのではないだろうか。
- (35) C. H., tom. IX, p. 1001.

(36) *ibid.*, p. 543.

(37) *Avant-propos de la Comédie humaine* [C. H., tom. I, p. 12.] (旧版)

(38) 人口増加と都市の発達をもつて進歩とみる思想は、七月王政期のそれであった。R. FORTASSIER: op. cit., p. 361. 参照。

(39) C. H., tom. IX, p. 426.

(40) *ibid.*, p. 481.

(41) *ibid.*, p. 739. ただし、この町はカトリックの住民で占められている。バルザックの思想に適っているわけである。

(42) バルザックは本来、積極的な文明推進論者である。〔…〕, *la Société, loin de le (=l'homme) dépraver, comme l'a prétendu Rousseau, le perfectionne, le rend meilleur*〕 [Avant-propos: C. H., tom. I, p. 12.] それも、前注に述べたように、カトリシズムによる人間的打算の

抑制が絶対条件ということになっている。